紫式部日記傍註

下

左傳昭公元年
先王之樂所以
節百事也故有
五節杜預註五
聲之節。又本朝
盤觴詳見後補

紫式部日記傍註下

中宮日ノ

めせらハサ日ヨリ。侍従宰相行成卿まひ姫のけうそくなと
つかうと。右宰相中將兼隆卿のめきらに。髻ゆ花ものいれく。葉
ちいたのそりて。そこ一ようひよう花ものいれく。葉
梅乃枝をそくいとこさしてすぶつにいとあむつ
乃こうちをいと見ましうきこえあれハ。ゆんくれ
おまへのしらひなり立ていとふ。ひまもなく歩りて部
つこうしう。火乃ひうり。ひうりもちいたる書
りぬるこいりのしどもとわさはしうつきあの日さやと端
のこれりへと。人の上とのこおほこと。そうかう殿上人乃

石曙文庫

傳付隨舞姫女房也詳見後補

甚面
ひさしうてすりけつ。むらひ。脂燭くさめくらしそう。
屏帽引覆
へいはんひさしおひ面をとりとおほうさのくらしさて。
おのしゝそしらうんと打ひいつるもまいむ○あさ
高階業遠朝臣傳注上唐衣
うなりとの衣のあそんけうばきあれうらうさあ。
やこのふもものふまきをもえつゝしうあ。さめ
窈窕身動
うちみうしろさもをあゝとやうあゝをそしあ。夜上
今上遣戸外
人うろふりてうしづくこあさようもわてうあらて
ぬらんを。夜もものひくやりさりおりませ
閑麗
ハゝをゆうせてしうふさ。なされハゝけとを
ひとくくのひゝとやひふむうれをひゝ人て
おくゝをとけうあうろ。右宰相中將乗隆卿のめゝさかうハ

樋澄付隨舞姫下女也詳見後補

麦春宮亮とハ藤原宣孝の男隆任なり是紫式部のあす継子なり

樋澄注上
ふゝしうひをまのふうとゝのひさうさあう
恐笑
さびうと人ほゝをゑむなりしそふ苜宰相乃
行成卿
おりひあしよいさ光今向うくふとなりう傳つさ十人
有つ又ひさうろうすあろしてこゝをいそうさあの
廂
ぬさとをさうゝ打ゝ苜さあもうハ尼や
顔顰
寅卯月
こ移あうてほうをて尼てさうさうの月あさ
火影
殿上人さいつゝろとなれと月こ移ふさびよをう
寅
あやゝ月人されめつゝしとゝへろ者さなりさうハ
注上
ゝ打る衣も尼てをうしゝを萩うを云乃をけめ
注上
あゝたさ物ふおほさやなうをこ一門ゝたうう入させ
尾張御前
ぬつうゝ松をうゝハとのゝうつうりをうゝを萩ハれまゝ

（試）ろんかやうの人（よわ）てせはくはらんをやうなるは
まぶ（散）いうらまれ（米）たしのくしぶはねはとなるあらを。異
（憂）ねうきれいまうーやをうひあうさまりをづひあ
まつくむとありひてぬすにおひやうをこ若アなと
（炭櫃）をとさしはよねてやとせえれへぞくくしう物も
ア（て）ゆくをとしいふやとふ殿あつーまーておとぐく
かうぐをぐしてハぬるやさりをともにとせめて（責立）
をせはてやまもわくどまうのりうぞまひ姫もの
いふくるーうくんとアあるにれくられくこのぞくら
あーうてやいめう（寐）美のやうにをあるわるおくくて
ありをせのめこのくられをんちぞめをらくところの

れうくさ事をかくるをたしのくもかうさ（帽額）ぶくり
うりていてぬるうーらつくをてるーげくひなと
をいぞくにくよはなんあくくにくく
（童御覧并卯の日ナリ）かくれかくらめうーくふぞらんの日乃日ハのあくら
ともハをろうなくくさうわ伐ぞているあくんあくぞん
りくなくゆくーくふあ（歩）ゐくなくび（並）ついてくをるハ。
（愛）あいなくむのくれていくあくくれあれぞうハくり
わくくてぬうくんよくくさあくくもるくー我もくれ
りくくさくうり人乃ゐりひてぞーいてくるあるれて
まや（目）めうくくつぞれくとう（勝）ゐくうけくやうあをを足くるを。
いくめくくさ人のめふくくぬくくりのくをくめを足くる

あるめり。さうく色雲もりなさ。ひろ中そ扇あふさと
ちらくしくもりせし。そこれうんこれ立まも
さるぶ。ぬてもあるうめ。さ所乃かとんすらあるといひあり。
人るおとしとあるそふこちも。いうふあくそうんと膳
あいなくうこりいれううあ。こえやこてのうこ丹波
ぬ日ハのあ代いさ白つ様でこれかさこ行衫おうしとこひ
すに。苏宰相の日ハ。あいろとうあて。おもつ仕の行成卿
うこあ。あ代条と代ゆ。こうこうねびあり。
日ハのうちも。ひとりいとまかまハ足こと。宰相の獨
中将ハ。ハいとそひやうに。う足ともおうし。これあ紀兼隆卿
柏表あこ先。うぐさハんくなり。かざこハめくなる中ふ。濃著

とうりハあ。えひ蒲萄うめ代こえてう。中くゆくくしく
ふあるこあしくあわのいろあひはやあと下仕のいとふ
さくれしう。あふさとうとて。六位のくくくとうふ。
ふ代あまやうこそ。屈艶こさあのうう。女房ハあうあ
うこうあま。日れくとう彼ゆうすて。いあねと
あくハ。又こそもこあ吟ひ。あうくハうまそうし。
ううまでうちいてんとハありひうきこあハ。ぬきとめふ目
足をあさまきこきのハ人のふなりきはていまうう
後のおをあさハこうれまなれすこひこありてう面目無
あくんもこくやきう。これまうこと。分れあうこあの美のやう馴過
ふありひつきられく。あるまこさこにうこふひうう。

ゆしくおかゆれいかめとまりてこもきいのるりきを。
侍従宰相（行成卿）のおきちはかりの。ゑのおまへのぞ見まうし
はりなり。さて（立）ちとまり（節）ぬ。ここのうちうとにたちをれ
れもこもの。人のわいふもかのさこゑ。乃女沛
のいうこゑ。右京。むこうといふ人なんいとあれてまを
うと宰相（兼隆卿）ゆ。むこうしうまてうの弦一枝うの
かひ（搔）（繕）いくらひすてゐすこ。ゑんこりなん。
右京と。添かねもたこうまをうこと。物乃（便）すありて。
はをえこうる人こおうしうをあり考うゑといひて。
いこうこくかまいうこ。むこうふすくたらてゑんこ
きんうちまうう弦。こうこゑすてやいてこれこのふ

日蔭の事詳見後補

とありふこんをあこいはこんのふておまへはあふことを
あまこうふらふ中はほうこうこうをえうこう
ふこんあこ。こうきんやはこれあこはあるまてひけ（蓬）（茅）（日蔭注上）
をまあてこうこうこ。こうこものいこうこく（反）（髪櫛カリ）
はうこくをゆひこ。こうこ（結）（副）こうこすぎはひはこ
ワこうまくこれうまこ（反）なんあ弦くこうこと思
こうの話へこいこやうのこゑあこきまてけまもあこも
きここうここゑしこ。（崐崙方）（割切）
ふこうこえこうこ。こうこやうと弦こまうこてこ
こうこ。たいふのわこうこここ一ここ称はこてふここ
（大輔）
おかうこうここのあここ日記とあこれここ

れまゐりはべるしくはれたりしさまなどもてあつかひ
おとしめきこえたまふ宣旨をすれどおとろくしくもむ
もとのさまはあらざりけり。とつぐすてぶちのひやう
にきこえもせぬ。さふも侍らぬ。あはれはうるはしう
とにてそこさえさえぬ。かうるうもしきつれづれの
人にてこそ中納言の君などのうち京の君などもいん
とたうやふさしとれたりけりとあれたんこそたく
あるきれとあるよりそこはうすいつこ
ろりのまこうつこと入なりつるハ女房とのくとうさひ
あくあるよなるへしなふそうれ耳とこもることか
うつるひこうあれとおそらすさめとあるの月はうの

小忌の長櫛を挿して、うちつきふたうくしさをこの月頃のてうく調樂
ハきふおうしうきり。ろやうなる厳上人おとしいうり
おこうつれくあるこんぷる松のこともむこうちうこと小公達今度
いつせ給ふ兼うりは女房ゆるうれてもおくと紙と
ありれ給へしいとこうしたるけなりやうこすすめる紙。
うにてうかくうつる。おそらしひしかとこにおりひ隠
こうひ。やすうひこ云ふなりやうのもろそ。かうこうまつ賞裾汙衫賀茂一
召名す
賀茂臨時祭イ
れくそこ名れやうよ。うつりこれおくと考る。係附乃雑禮
まつりれ給ひハとのく檀中ねの君なりうの日ハ四わいと
あれて。厳四とのねせき勞給へりうんうちめとまひ人の宿直
公達上達部舞
うんうちもおりて。夜一夜ほう厳日てりいとまのさて

りしきけはひしたり。つとめて。うちのおほいとの(内大臣)ゝ御随身。
このとのゝ御ずいじんにとらせていぬるなり。ひとひのはこ
のふたに。しろかね○のさうしはこをすゑたり。かゝみをしいれて
てぢん(沈)のくし。白かねのかうがいなど。つかひの君のびんかき(髪掻)たまふべき
けしきをしたり。はこのふたにあしで(葦手)にうきいでたる
は。日かげの返り事なめり。もじ(文字)ふたつおちてあやしう
ことの心たがひてもあるかなと見えしは。かのおとゞ(大臣)の宮よりと
心えたまへりけるを。かうことさらめかしくしなしたりけるとぞ
こと侍りし。はかなき(計無)たはぶれ(戯)わざを。いとほ
しうこそ。とのゝうへもまうのぼりて物御らんず。つかひの
君の藤かざして。いとものものしくおとなびたまへるを。くらの

しはすのすゑ九日
にはじめてまいりし
あるハ是寛弘
三年十二月廿
九日にまゐりし

命婦は。まひ人にはめも見やらず。うちまもりうちまもりぞなきける。
御物いみなれば。みやしろ(御社)よりうしの時にぞかへりまゐれ
ば。御かぐら(御神楽)などもさまばかりなり。○かね時(人名なり)が。こぞ(去年)までは。
いとつきづきしげなりしを。こよなくおとろへたるふる
まひぞ。みしるまじき人のうへなれど。あはれにおもひ
よそへらるゝことおほく侍る。しはす(注上)の廿九日にまゐる。はじめて
まゐりしも。こよひのことぞかし。いみじくも夢ぢに
まどはれしかなとおもひいづれば。こよなくたちなれにけるも
うとまし(疏敷)の身のほどやとおぼゆ。夜いたうふけに
けり。御物いみにおはしましければ。おまへにもまゐらず。
心ぼそくてうちふしたるに。まへなる人々のうちつけて

弘仁内裏式曰。中務省率侍従内舎人大舎人等。各持桃弓葦矢。陰陽寮陰陽師齋郎執祭具。方相一人著假面黄金四目。其衣朱。皂裳。右執戈。左執楯。侲子廿人。同著紺布衣朱抹額。共入殿庭列立云云

ハ。猶いとけはひことなり(異)けり。さとにてハいまはねなま
しものを。さもいざときくつ(屣)のしげさかなと。いろめかし
くいひゐるをきゝて

年くれてわが世ふけゆく風のおとに心のうちのすさまじきかな

とぞひとりごたれし。つごもりのよ。ついな(追儺 注上)ハいとゝく(疾)はてぬ
れば。はぐろめ(歯黒)つけなど。はかなきつくろひどもすとてうち
とけゐたるに。弁乃内侍きてものがたりしてふしたまへり。
たくみ(内匠)のくら人ハなげしのしもにゐて。あてき(童女ノ名)がぬふもの
のかさね。ひねり(捻)をしへ(教)など。つく〴〵としゐたるに。おまへの
かたにいみじくのゝしる(罵)。ないしおこせど。とみに(頓)もおきず。
人のなき(泣)さはぐ(騒)おとのきこゆるに。いとゆゝしく(忌々敷)。ものもおぼえず。

ひ(火)かとおもへど。さにはあらず。たくみ(内匠)の君。いざ〳〵とさきにおし
たてゝ。ともかうも宮しもにおはします。まづまゐり
て見たてまつらんと。内侍をあらゝかにつきおどろかして。三人
ふるふ(揮)〳〵。あしもそらにてまゐりたれば。はだか(裸)なる人ぞ
ふたりゐたる。ゆげひ(靫負)。こひやうぶなりけり。かくなりけりと見る
に。いよ〳〵むくつけし(蠢)。みづし(御厨子)どころの人もみないで。
宮のさぶらひも。たきぐち(滝口)も。なやらひ(儺)はてけるまゝに。みな
まかでにけり。てをたゝきのゝしれど。いらへする人もなし。
おものやどり(御膳宿)のとじ(刀自)をよび(呼)いでたるに。殿上にひやうぶのぜうと
いふくら人。よべ〳〵と。はぢ(恥)もわすれて。くちづからいひたれ
ば。たづぬれど。まかでにけり。つらき(怨)ことかぎりなし。

坎日自節中計至平月辰日云云

式部丞とけなりぞまゐりて、ところ〳〵のさしあぶら(差油)
ども、たゞひとりさしいれられてありく。人〳〵ものおぼ
えず、むかひゐたるもあり。うへより御つかひなどあり。いみ
じうおそろしうこそ侍りしか。をさめ(納)どのにある御そ(衣)とり
いでさせて、この人〳〵にたまふ。ついたちのさうぞくはと
らざりければ、さりげもなくてあれど、はだか(裸)すがたはわすられず、
おそろしきものから、をかしうともいはず。こといみも
しあへず。(寛弘六年)正月一日かん(坎 注上)日なりければ、わかみやの
御いたゞき(戴)もちゐ(餅)のことゝまりぬ。三日ぞのぼらせ給ふ。ことし
の御まかなひは大納言の君。さうぞく、ついたちの日はくれなゐ、
えびぞめ(蒲萄)、からぎぬはあかいろ、ぢずりのも。二日こうばい(紅梅)の

薄色トハ紫ノウスキヲ云

おりもの、かいねり(皆練)はこき。あをいろのからぎぬ、いろずりのも。三日
はからあやのさくらがさね、からぎぬはすはうのおりもの。
かいねりはこきをきる日はくれなゐはなかに、くれなゐをきる日は
こきをなかになど、れいのことなり。もえぎ、すはう、山吹の
こきうすき、こうばい、うすいろ(薄ー 注上)など、つねのいろ〳〵をひとたびに
(六)むつばかりと、うはぎとぞ、いとさまよきほどにさぶらふ。
さいしやうの君の御はかし(佩刀)とりて、とのゝいだきたてまつらせ
給ふにつゞきて、まうのぼり給ふ。くれなゐの三へ五へ、三へ五
へとまぜつゝ、おなじいろのうちたる七へに、ひとへを
ぬひかさね、かさねまぜつゝ、うへにおなじいろのかたもん(固文)の
五へ、うちき(掛)、えびぞめのうきもんのかたもんの

ぬひざまさへかど〳〵し。三へがさねの裳。あかいろの
から衣。ひしのもんをおりて。しざまもいとからめいたり。
いとをかしげに。かみなどもつねよりつくろひまして。やう
だいもてなし。らう〳〵しくをかし。たけだちよきほどに。
ふくらか(肨)なる人の。かほ(顔)いと(最)こまか(濃)に。にほひをかしげなり。
大納言の君は。いとさゝやかに。ちひさしといふべきかたなる
人の。しろううつくしげに。つぶ〳〵とこえ(肥)たるが。うはべは
いとそびやかに。かみ(髪)たけに三寸ばかりあまりたる。すそ
つきかんざしぞ。すべてにるものなく。こまかにうつくし
き。かほも。いとらう〳〵しく(良〻敷)。もてなしなど。らうたげに
なよびかなり。せんじ(宣旨)の君は。さゝやけ(少)人の。いとほそやかに

そびえて。かみのすぢこまやかにきよらにて。おひさがりの
すゑより。一尺ばかりあまりたまへり。いと心はづかしげに。
きはもなくあて(妙)なるさましたまへり。物よりさしあゆみ
ていでおはしたるも。わづらはしう。こゝろづかひせらるゝこゝち
す。あてなる人は。かうこそあらめと。こゝろざま。ものうちのたまへ
るも。おぼゆ。この次よ人のかたちかたりきこえさせば。物
いひさがな(不良)くやはべるべき。たゞいまをや。さしあたりたる人の
ことは。わづらはし。いかにぞやなど。すこしもかたほ(頑)なるは
いひはべらじ。宰相の君は。北野の三位のよ。ふくらかに。いとやう
だいこまめかしう。かど〳〵(廉〻)しきかたちしたる人の。うち
ゐたるよりも。見もてゆくに。こよなくうちまさり。らう〳〵

しらそぐらつきにそろつしけさもあひやうなりこと
そひとりてあしなといと（美ゝ敷）しくくるやうまそ見て
語へるぐんぎ海もいとめやとくふうつくしきわうぢまいて
そりうしき雨をひとり。こヤ将の君いぢこちとおくあて
にぶまあうしう二月いろりけそりて柳のうまきてり。やう
ないとうつくしけよりてるしんすくぐんぐんかもとろ
ひとふありひとるかてもなきやうにものつきとしいとを
そらくひあまり見くうしこまて。こあぬるあり。そくくと（籠 腹 黒）
おさ人あり海よりてるしぐひつくろ人あくしやくく
それよりひいりて所とをうのひいづくあくにとり（註巻十七歌裏十三）
ぬき雨法い語へるうあまうしろめくをなる。その円伯そ（影 護）

又いとうをなる人。ひけたちいとうれほとなるうねうろ（長 之）
海すくつぐいともものくくしくぐいまめいろやうぐいすて。
ぐまうにとりたてくおうしけとを見とあわうぐいとわうよ
きふをひくくくるりたてうて。名代あくひきろき（ウイ）
あと。人はとくしうかしらつぐんうしをいつぐかをそ。（額）
あるわううけとをてぐるやふあいをやうづきうう。そく（愛 敬）
けりにすてるりてぐうあるをもめやとくぐはのとりいい川
うを海ぐもぐうろめいうれくぐぐてのしてあくめと
人乃あめにちつを人うなりぐえんうりうしめくかを（様）
ハ形ぐ。式部のれりくハれとうとなりいとふくくきすき（最 脇）
くぐぐる人の名いとちろくまやひてぐやういとうあに

うちとめ（めイ）がこもいいこしくうりてをくいあるこ
へしぬくろひろつ（畔）ぐしてをよはいつぬりうるやう
ぐいのいとれしきめを侍しをまをひこいつこるとぬこ
ふこもけなうしろをこうあいこをやうもれはうりろ（若）
うち（人）ぬ中（容貞）にかこちうしとれすへうはいこぶぶぎんぎをと
ふはこをやれる人乃やうこいいとうめしこをして。
こをうりくりとこいとこちてをけよ一人（事 痛 上ノ十七ニ注）あまり
うけるをおちかをそりて侍りをかもかどくしうあるあり
しの人やとそんて侍りをちはなを（直）をこをあるし
源式アはひけをれはふをひやうなるやとすをかをまや
ふをろまにいとおしくらうけるきはひあこく。

乾
うりうに人のむすめとおはやうをあしうりこ高遠
かをもいとこをよきふ侍りをれりはは殿上人のこの
すかうりをれをとうりてはかくれあきをとく人
限
をまを侍もをうはいするふかくをてを侍りうしをあの
侍従
をうこをていとこをあふれうけなりしをはいとちい
うくはをくなを侍をはすをあるせまりこをを高侍
ひとをひつこをやれ（頼）しをやこ侍あり。かこみをうちこをふ
髪 褂
すこしあまりてををとをこをやうをそこをてまりり
侍りををそれをひなりけりをはいとをうこをを帝の
弁といふ人侍りを。を中納言（親信卿）のむををありををつこと
をこしを給はういをる新しくをはいをうをれをる

楊子曰膠柱ニ調瑟ヲ云云

人のまじり（眥）いとひきて、かほもこゝ（此）はと見ゆる所なく。
いとしろう、手つきかひな（肘）つきいとおかしげに、かみ（髪）ハ
みそめ侍し春ハ、たけに一尺ばかりあまりて、こちたく（事痛）
おほかりげなりしが、あさましうわけたるやうにおちて。
すそもさすがにほそらず、ながさハすこしあまりて侍
めり。こまといふ人、かみいとながく侍りし。むかしハ
よきわかうど、いまハことぢ（箏柱）ににかは（膠 注上）さすやうにてこそ
さとゐして侍るなれ。かういひ〳〵て、心ばせぞかたう侍るか
し。それもとりどりに、いとわろきもなし。又すぐれて
おかしう、心おもく、かどゆゑも、よしも、うしろやすさも。
みなぐ（具）することハかたし。さま〴〵いづれをかとるべきと

覚ゆるもおほく侍る。さもけしからずも侍ることゞもか
な。斎院に中将の君といふ人侍るたより
ありて、人のもとにかきかはしたる文を、みそかに人とりて
見せ侍し。いとこそえんに、われのみ世にハものゝゆゑしり、
心ふかき、たぐひハあらじ。すべて世の人ハ心もきも（肝）
なきやうに思ひて侍るべかめる。見侍しに、すゞろにこゝろ
やましう、おほやけばらとか、よからぬ人のいふやうに
にく（悪）くこそ思ひ給へられしか。文かきにもあれ、うたなど
のおかしからんハ、わが院よりほかに、たれか見しり給ふ
人のあらん。世におかしき人のおひ（生）いでば、わが院こそ御
らんしるべけれなどぞ侍る。げにことわりなれどワ

方さはがしくなりぬ。斎院よりいそぎたつ。午の
とき過てゆくと見るもとゝふゆゝしきを。ゆゝしう
らうくしうおとなびたる。人々めゝしやうなりぬ。ゆゝ
人とゝのへていとまんまよはの見ぬるわらわ人
あるをしるべとれば。ゆゝしうこそ。つゝかいりたちそこ
人も物しおうさゆゆづくよ。殿人あり。有明花の
郭公の方〇面よりゆいりたれば。院はいとはるのゆへれて
してそのさはがしいと世くあり。神閑又まさ紛
ゝも物しうゆうのかゝせあり。ゆゝしう夜あるまいり
給ひあるなりあるとゆゝしさありとまらとどりく
つきとのつゝきとりこのむ面となりめれて。えんあることく
知好艶

奥無

り給つくえん中よりあふのあるべいひをくゝしとりて
ゆゝしうゆうゆいとむれ本殿ありつまてろんを勢あく。
かの院はまらひ侍ゝはうこまてちゝぬれとこと
いそあひをのいとゝとゝ人のあるさ名殿ひあ月をぐさ
あゝをなとゆゝしうゝとのつゝゝ媚あめれあひ侍り
あんとやゝまて見れ人のうちにつをあこうしの
齢ゝひふつまれたとれあうゝ。そのあるうゝいまく。
こゆうゝちりの殿もいとんとあこちたんはこよ
あう人はとゝゝも侍るまゝ。れとうちりてうあて
四くれ見あゝしこゝろひ侍ゝ。女御后きいあ弱に。
うのはうこのはそあとゝひあゝふゝはあうゝも物く。

廊
軒

れとこも女をいどましさことなふうちとぎえ乃
やうとして向めしきとぺいとあくしとあり
いれてずこしまうとんと隊ふ人ぺおほうまふく
いそぬ侍るをんやをくりの耻らせひごあるんらんの。
あ侍もれしまあ人げさ将ことあくんをせのうもなくやん。
あるこやう乃人はやとれまにてちうあうちかう
へハ中宮皇后の人うれうぺりんよういなるもいひ侍う
なるへ。ようう中らうれはそめまうひさうさそ
めたくのこ侍うめうさうのこしくえのにたあるくうり僧都
にハあるをぺくることをぺ侍うこれうをうえうく
侍うやうあれと人ハこれ越無とうくしてあれうとうり

侍うこことを侍るをうのことまれてかのこ殿とそれあこそ
侍うめうこ。それと若ろうとふありうあるんこまあ人頑
こう侍う先うせこ乃くるーうざれ侍るむもやとかこ頑
あるんそこ大こ侍いとくあきけなこもうあと乃
侍うされこ高日ハあめ西わくらくしくんくく
おこしまん物侍あまうあつこせこ者あ人これハうなふ
もいひいでこ。ひいでこんもう侍やをくこうあき
人ハぺせこかこまのとおほ侍あこひうぺまふ物まん頑
おうあと中くなうこと侍いてこうそれこうふハとう
うるさなうこ。こふぬうさようハけさ人のあり
はまくつまハうあなうぺあまひうくくしさこしぺ物乃

ありにいひいてしすゑ幾まさいとあさかさやとふ
れりゆゑてそこにあううとなりと同しめ如
ちとに名れハ者くてれとりあるてをくれと者先
やとさことふ如りしすれをしさふらこあいて家
人のむとあともハ名れいとうかるひ者させる紙
よ久くなしひよ久ゆとそんえて作るいまハやうく
おとあひさせ名ものにせのめてさ海人乃人のもた
けりことをずさするもとれすとそれはらんしさう
てこの家日りせてこ我海上人をなにもあれくこと
ふおりさとれしと思いふ人のめりとこるさろめ
ようさうとそんるもけりえてをとりとれせいと

あくつきいとといてくる物うつをけなくひきいれる。
うしてもあくもんとおりの名れとものあるひ
なとりうてくえいやうのえんちといふのふを
うさあくあるかさりみるはめ人なり。女院をやうれ
不あくく月をも見花をとめつるひさるのえんあうこと
くとあつくすもあうるてもいふんあさゆをちうを
好しをなさつりにてをとをうをあうういひ。
りへれうさをもいひをれていくくらあう
をずくさ人なんをたうにてくなるにうをくくハいひ
ゆるめるをりくえみゆるめをなれをえしけ。
かるくに人のをちうをうなさいくとせんうう。

あくいてとしひさしいてんをあやしさいとうはてもありめつらさとなりぬれば式人のゐありてしとはいまはゐめりなるかゐつきしとゐふくゐ記さ入
てんうかしこうしむなて記てけてさうゐもひ日爛吟
ひつさうぬほとふれりくりありさゐり
ちさうひくりちひんこのぬとうたなるへしまりハ
京の方更まりて行く啓申せ行つさてありける存信卿
ありにいとあへふこめぬ行ふ上らうちハたいめんし愛
行ことかうし。又あひてもゐよとしらうくくく
のゐへくも尺ぬ行ぬ繁の学るまれまとあるを。
ゐのとうゐまりさにも行れとつまりちつしと

こうゐ花うこもせうゐ行ゐとあいゐりとへてこうれりこと愛
はのうなる学ちひとも尺こしぬうの人ハさそ行ゐさふう。
かるまりらひなるめれハこゐあれあて人もみるふ越無妙
ちさうゐなる式ぬさこめさきゐるのりてゐまそ。ゐ饗
ゐりゐの下らうれいてあふと大納言ふまうしはと道綱卿
ゐる行ゐれハさるゐ支人くさふまてつれ〇なるも
ゐりれさいとまふさうりくりハたいめんする人ゐて罷
海うて行ゐ河も行なるうのはるのうんさちあゐのはさ
にまりゐれぬわとをきいせさ勞行ハをのくゐうせの啓
人をのつくうりくに行のしまてうの人ゐいりハ。風知
ちさ海しまふさちいつひゐまちいつ人さうぬふふまて

この文をうけとりてとうあれうまといふへうめつをおとこう
に侍る。殿院ワうの人をこそ我れとしめ給ふなるへし。
ゆりとて見る方乃ことこころあり。ほかの人ハめとゝ見ゆし。
もの我もこゝろめしとゝ。ありひあるつゝんう又見る方さ。
すゝく人とゝ見くうこハやとゝ。ワうん我りらひんこゝは
難
かゝう人い見る我さハおりてゝ。まゝ見きうゝに人どなさ
ふゝ。よ我そ誹謗ゝ秘るんのこゝそ見しあゝう
めきゝいとゝらんきう勝まわゝう侍ふこうきうゝ。人乃
かくゝとゝ見ゝり書る我ゝめをみく見ちに見せてゝう
容
ゝゝ侍ふゝう祓ゝうゝ和泉式部そいつゝ思うふといふ人ゝそ
妒
おりゝうかきうゝ書る。それといつゝハ宇ゝうめかさ

ゝそあれゝうちうけさくふこゝそゝ書ゝ
オ
さえあゝ人ゝうあいゝゝゝ我まわひも見て侍ありゝうハいと
おゝうきこゝのおはえうゝ我ゝはこゝの宇ゝみ海
ゝそ侍ゝうあれゝうちにまゝせうこゝりふゝゝゝれ
ゝうゝ一ゝのゝのゝふゝまゝうゝゝそ人侍りゝそれ不人の
難
ゝゝゝゝん宇ゝゝゝりゝゝんハゝてゝゝゝまゝて
ゝうハえゝゝロよいとうゝこのゝまゝゝあゝりゝと和見ゝゝう
高階朝臣業遠
すちに侍ゝゝうゝ書ゝうゝゝみゝゝとハ見ゝゝ侍ゝゝ。
江侍従
ゝんゝ我ゝゝこの小乃ゝう我ゝ。殿なゝの見ゝりゝハ。
はゝひゝ糸門ゝうゝひ侍ゝ。ゝふゝゝゝとゝゝゝはゝゝう
れゝゝ。はゝゝゝゝくゝゝ宇ゝみゝゝゝゝゝのゝゝに

つきてよみちらさねと。きこゆるかきりハ。はかなきをり
ふしのことも。それこそはつかしきくちつきに侍れ。やゝ(稍)も
せハこしはなれぬはかりをれかゝりたる歌よみいてゝ。
えもいはぬよしはみことしても。われかしこにおもひたる
人。にくゝも。いとをしくもおほえ侍るわさなり。清少納言
こそしたりかほにいみしう侍りける人。さはかりさかし
たちまなかきちらして侍るほとも。よく見れはまた
いとたへ(堪)ぬことおほかり。かく(斯)人にことならんとおもひ
このめる人ハ。かならす見おとりし。ゆくすゑうたて(薄情)のミ
侍れハ。えむになりぬる人ハ。いとすこう(凄)すゝろ(不意)なるをりも。
もののあはれにすゝみ。をかしきことも見すくさぬほとに。

おのつからさるましくあたなるさまにもなるに侍るへし。
そのあたになりぬる人のはて。いかてかハよく侍らん。かく
かた〳〵につけて。一ふしのおもひいてらるへきことなくて
すくし侍りぬる人の。ことにゆくすゑのたのみもなきこそなく
さめおもふかたたに侍らねと。心すこうもてなす身そと
たにおもひ侍らし。その心なほうせぬにや。ものおもひまさる
秋の夜も。はし(端)にいてゐてなかめハ。いとゝ月やいにしへほ
めてけんと見えたるありさまを。もよほすやうに侍るへし。
世の人のいむといひ侍るとか(失)をも。かならすわたり侍りなんと。
はゝかられて。すこしおくにひき入てそ。さすかに心の
うちにハつきせすおもひつゝけられ侍る。風乃すゝしき

ゆくさきしのびやうにぬひとりてとをうさるゝてぱるけさ
くつろとゝゆしうの人やうんとゆしくなと笑ひ侍
しもどこあもあくまきもゝ侍まれぱうはめ屋しう
くろこすけうぢ曹司 琴 和琴 調 うしにざうのことこむ(かう)。
ふよ入あ西ふる日。こぐうせあもいひ侍めまふ 倒
ちりつりくぱせてたゆしに侍とちられたさ 厨子
まふぐびうし入つぱ琵琶 左 右 ひくをひうこうまくく侍り。
ゆきなりづ日厨子とう侍ひよ花さをくつて侍 積
めひちうまはぱふる京ものかうりけ。えもいとひむものすふ 巣
なりまるむつしくくひちまてあ京てうう人も侍
をかうつうまゆ式部大宣孝一人も侍をもつうとゝたうう。

なりにしほでふうく人もおくふあ。ぱれをつまく
せあくあまりある内ぱ一巻ひりつりひさいて見侍る。
式部カ仕女ナリ
女房あつまりくおまはうくれたれぱさいはすく
ぱきなりぱてう何条女うまんかふはもむぱしはうやう
むとふ人はせい制しうぱ後ちうこちの成を侍
にもはいこう人のりをぱいりちあうめうしも。
みあためりなりとはいまりくはれはぱりひくう
ぱきやうなりぱとうをこぱをあうぱ川のこと人まう
くふとくくなりぱこうふうくしくふちうをう
ひあう人はりうる川つまくなる人のはうこうとあさま
にぱうさ汎古こひきうしぱとあひうちにくちひくう。

数珠すれば
ちひろにまさせつつ
めぐりあふよつむ
はしき事を
いひてやくなし
まいすてぬ
いとしわかく
つすちとうつ
のようなる
ねすることふ
ふかあるねと
なりてくゆきもの
ものうはこのこ
物妬
ふくこをみるまは
あんなはゆるとそ
おいそ宇和と
これうつくしと
もいとうちとを
ようをふむつ
ゆりく
業
我仕
戾
益
恥
老毛
異
曲
睦

人めをもてなしめづらしがるまでもうちとけて人に
おいらかなるすがたをみるにつけてのみやうふかきあるべきに
してこうまでもれうしくうちとけもしたるかなしかるべきに
なめしくあるべくもあらぬ人のかたちのためしなきまでなるべきに
にくうはあらねど我はとくすくらすらんをこそ
きとくしくなりぬる人ぞかたはらにつきそはれうい
きしるしはなかるべきにかくまでめとまるべきこそめつれ
くかあるべきものの我いとあさましきまでなるべきに
まちてぞいくうちにもうるさくせばしつきなるべく
ものふかりぬいひすてうちにくをなりぬる人と。

人のうへうちとけめつる人とはいとしるべくもあらぬまでもめとたて
らるべきはそれ人のくせをかりはいとく
なるべきものの業ともこそはつくるべきなりけ
つくるまでうはあらぬ人すこしてすくふとはいてつる。
ものさてはあやまちてもいひそこなはんをこそ
あるべきはえあらぬとふるまへ人は我とすくむもれ
はなれ人をおりひうるむへ人をれとはいとうもえあらぬ。
慈悲
ものうれとすれ佛さふ三やうをそうつとはあるし
説　濁
ちやはとさはふなるまいくかどうにうぬるを世の
人はなつるさ人はそうめくしそれとはれまうく
いとんといみしきことの業をいひつきむひひるくきし紀

あしう侍りけるをもさハあしきをすてゝかしこき人ハ
おかうなかとのきゝめそゝられほとハ見て侍るへし。（堤）
さゑもの（左衛門）ないしといふ人侍り。あやしうすゝろによからす
思ひけるもえしり侍らぬ心うきしりうこと（後言）の多うきこえ侍りし。
うちのうへ（一條帝御事）の源氏の物かたり人に
よませ給つゝきこしめしけるにこの人ハ日本紀をこそ
よみ侍るへけれ。まことにさえ（オ）あるへしとのたまはせけるを
ふとおしはかりにいみしうなむさえ（オ）かあると殿上人なと
にいひちらして日本紀のみつほねとそつけたりける。
いとをかしくそ侍る。このふるさとの女のまへにてたにつゝみ
侍るものをさる所にてさえさかしいて侍らんよ。この式部の丞（兄 式部カ兄惟規ヲ云）

といふ人のわらハにて史記といふふみよみ侍しときゝならひつゝ
かの人ハおそう（遅）よみとりわするゝところをもあやし（自身カ躰ヲ云）
きまてそさとく（敏）侍しかハふみに心入たるおやハくちおし（式部カ父爲時ヲ云）
う。おのこ（男子）にてもたらぬこそさいはひなかりけれとそ。
つねになけかれ侍し。それをおのこたにさえ（オ）かりぬる
人ハいかにそやはなやかならすのみ侍るめるよとやうやう人
のいふをもきゝとめてのち一といふもしをたにかきわた
し侍らすいとてつゝ（手筒）にあさましく侍り。よみし書なといひ
けんものめにもとゝめすなりて侍しにいよいよかゝる事
きゝ侍しかハいかに人もつたへきゝてにくむらんとはつかし
さに御ひやうふ（屏風）のうへにかきたる事をたによまぬかほをし

侍りと京のたまへすて文集の所くらゐせ給ふとして。
さうぢまうとしたろ〳〵めさせまゐり給ふおほひさう
ぐぷいとものひて人のさうぢあるものひさうくにおとゝ
乃夏ころ〳〵樂僧といふぬゝこくうんとそぶとけるく
かうそ〳〵ぺあてさてさせくるもかくし侍りあも
ものひさせ侍りし。殿もうちもきしたとゝせ給ふく。
はゝことをめてさうゝせ給てそ後ハをゝせ給ふ後てふ
かうるませ給ふとすることゝさうのものいひの内侍ハえらう
さうゝしぷもうるハいふそゝ侍るうんはとぷゝて世中
とワさもきくうたものに侍りきぷいふいふハふくいと
し侍るゝしぷゝといふともかくいふともぷてあるこ佛よ

堪 隠 將彼 聞 謗 角 蔑

ゝあるこなくこうをあるゝひ侍るうんぷ世のいとりこさ丁ハ
すゝてつあハうりぷとこまゝこしなりふて侍れハひゝまま
あるうんふきさいをゝうもぷ侍るゝをぷひこさちにそむこさ
くもぷきにのはゝめかとのあたりつこやうなん侍へろ
なるうれまやをゝひ侍るゝりぷこもぷこさ丁はるる
ありまて侍るぷいうあれうれいかまそぷこめつゝ
ゝそこをやうゝまをぷもいゝたあさまうり侍るんはと。
ふふた人まのやうるゝたぷいうハあゝかるうこの
こゝをゝおりひ侍るぷもれつこぬゝさ人ハまこうるゝを
しもるひ侍りゝしぷこの世ゝるゝあゝのこおかく
侍れハぷるハまつをてそう侍りぷあこまえてこ

聖 猶豫 懈怠 息 真似 微 罪

つけ侍らぬ事を。よきもあしきも世にあること身のうへの
うれへにても。のこることを聞えさせおかまほしう侍るぞかし。
けしからぬ人を思ひきこえさすとても。かゝるべきことやは
侍る。されどつれ〴〵におはしますらん。又つれ〴〵の心
を御らんぜよ。又おぼさんことの。いとかうやく(益)なき事おほ
からずとも。かゝせ給へ。見給へん。夢にてもちり侍らばいと
いみじからん。耳もおほくぞ侍る。このごろほご(反古)もみな
やりやきうしなひ。ひゝな(雛)などの屋づくりにこの春し侍り
にしのち。人のふみも侍らず。紙にはわざとかゝじと思ひ
侍るぞ。いとやつれたる。ことわろきかたには侍らず。ことさら
によ。御らんじてはとう給はらん。えよみ侍らぬ所々

おとし(落)ぞ侍らん。それはなにかは。御らんじもらさせ給へ
しかく世の人ごとのうへを思ひ〳〵。はてにとぢめ侍れ
ば。身をおもひすてぬ心の。さもふかう侍るべきかな。なにせんとにか
は侍らん。十一日のあか月。みだう(御堂)へわたらせ給ふ。御車には
とのゝうへ。人々は舟にのりてさしわたりけり。それに
おくれて。よさりまうのぼる。教化おこなふところ。山寺のさほう
うつして。大さんげ(懺悔)と。しろ(白)いたう(塔)など。おほ(多)くゑにかき(繪書)て
きやう(興)じあそび給ふ。かんだちめおほくはまかでて。ゑひて。
すこしぞとまり給へる。後夜にはだうし(導師)けう(教)化とも
説相ことに心々。廿人ながら。宮のかくておはしますよしを
ことばひ(涯)ろしかこまてさしつゝかるしともあまた

紫式部日記傍註

或僧正師ノ云
寶篋印陀羅
尼經ニ曰況有衆
人或作塔形ヲ
或罪障悉滅ス
所求ルカ如シ意ノ云云

今様
おさへの池のうとろうりん
こけむや

ありぬべきことなどを人まねにてこそ
御堂 槽
いとそふこたちの殿うしはつるまぶしふとをあけて
池 橋
ゐけまへいきふけたりれたるこしうらん浅
白 地
とうて。宮の大夫はぬ移へり。夜はうこゑる海いつ勞
ゐへうはと。宰相の君ゐると物うすりてだまへゐまを。
外
うらこけぬるいうちもことをれうこはくなり月ゐ
今 撲 歌 注
ろにうしいて。ぴやうなる君遊いさやうこうふも
ふ孫ゐのうゐはをうる線ゐうれうしくゆゆうり。
藤原正光卿
大くらはのゐゐくまるすふをうらをへんも
てまるこゐやこのひやうゐてゐうろうてれおう
客
うゐゐをいみとれうらのへもこそふゐうぬゐのうち

白氏文集巻第三日海漫漫徐福文成多誑誕上元太一虚初禱

ゐやれいとはうこつくむといひうをこつをゐへうすや。
大夫徐福文成誑誕れはしとうらをゐぷこゐも
誦
こゐもゐるいまめうくゐ線ゐ
苗 吹 萍
くぬえなしふきあせるゐ月れ風のをひえ
計 無
うゐこゐゐこもゐいこ。ゐうれうなりり。
源氏の和歌れまへゐ線ごのくはらんしてをいのをゐ
こをいて紀こをはいてにゐれえをゐれうを
ゐかへゐのへゐ
紀のをゐたれれゐへのゐてすゐゐはしをゐふ
をこをゐれを
へまをれへゐのの線をれこのすれのをいはちゐしをん

めざましうときこゆ。渡殿にねたる夜戸をたゝく人あり
ときけどおそろしさにおともせであかしたるつとめて
よもすがらくひな(水雞)よりけになくなくぞまきの戸ぐちにたゝきわびつる
返し
たゞならじとばかりたゝくくひなゆゑあけてはいかにくやしからまし

寛弘六年十月四日一条院焼亡十九日行幸左大臣枇杷亭十一月廿五日第三皇子誕生十二月廿六日中宮入内

ことし正月三日まで宮たちの御いたゞきもちひ(戴餅)に日々にまう
のぼらせ給ふ御ともにみな上らふもまゐる。左衛門(頼通卿)
かみいだき(懐)たてまつりて殿もちひ(餅)はとりつぎて上にたてまつらせ
給ふ。二間のひんがしの戸にむかひて上のいたゞかせたて
まつらせ給ふなり。おりのぼらせ給ふぎしき見物なり。
大宮(皇太后宮 東三條院)ハのぼらせ給はず。ことしのついたち御まかなひ宰相

例のものゝいろあひとハ生氣の色なり生氣北よりある時ハ緑色なり

膏藥千瘡一切病膏也見延喜式

の君。例のものゝいろあひ(御藥ノ生氣ノ色ナリ注上)などことにいとをかし。蔵人(女一)は
たくみひやうご(命婦)つかうまつる。かみあげたるかたちなどこそ
御まかなひはいとことにみえ給へ。わりなしや。くすりの
女官(藥 注上)にて。ふみや(大學)のはかせさかし(賢)だちさい(才)らがりをり。
たうやく(膏 音)くばれる例のことどもなり。二日宮の大饗
はとまりて。臨時客ひんがしおもてとりはらひて例
のごとしたり。かんだちめハ傅(道綱卿)の大納言。右大将(實資卿)。中宮大夫(齊信卿)
四条大納言(公任卿)。権中納言(隆家卿)。侍従の中納言(行成卿)。左衛門督(頼通卿)。ありくにの(有國卿)
宰相。大蔵卿(正光卿)。左兵衛督(實成卿)。源宰相(源頼定卿)。むかひつゝゐ給へり。
源中納言(俊賢卿)。右衛門督(注前)。左右の宰相中将(源經房卿 兼隆卿)ハなげし(長押)のしもに。
殿上人の座の上につき給へり。わかみやいだきいでたてまつり給

例の事たいくせとハ祝詞日命幸カタカレノ言ヲ云

てきいろこもいくせもうぷつくこにさこて行ゑ。
うへよいと云て死をまんと夜の行幸ぷと行てこと
ゐ行くぬくとさ詞ふもとうつくうりこえ行てや
行へし。右大将命と興きうどこを行ぷうへるまいり行て。
うへ夜上ていてうせ行くぷあをひいりをう夜をい
の点ハ勞行へりぷとつくいとりひてぷくろゐるる醉
なこれてて此浄まへのぷあをひめいつふぷうへいて
いうさゆうてに久ひこうりゐとむうこせ夜へう。僻
うハうと一ゐつうりまつきぷやのうりまハつ〇乃日
なりぷめくとやせあうせゐぷうらいてんよいとうこと頑
ゐゐむぷこよゐうへゐぬぷ夜醉ひるめしぷいとぷいろゐひ

拾遺集春
壬生忠峯
子日をろ野へ小
小松のおうりをハ
千代のあーゐ
行とひうまー

きよけよぷかうををるやうふゐうまゐゐくくぷーころ夜
凍すきまーけまてひこころれこーまををいうくーく氣
見をうーふぷくむつーきまてひをうみさに見をゐ
こそうゐ久れとゐゐとのこりうる夜ろ我ひき
ゐけつこをり行。注上ゐ小松乃ゐりをハとうちを誦
行ゐこーうんこをうをぷ見ゐ人のゐうる海
めてこくゐゐ行ぷ又の日夕つこぷつーくかすこ
ゐる夜我ぷをつきをる汙のゐーゐきまてぷこをこ夜
のうへ乃ゐ行と我かのうに見をく中つこ我めのこぷへ乃
ゐをらすきこをめてここ。この命婦そりのーゐえて遊口
かとくーくハゆうへ人ゐれぷーうこゐよゐうてぷ二乃夜

のはいかに。正月十五日。晩方いかなこがねの花あけ（明）て。ぞうたなくあり。ちかくあるに。
ぬまのうのつかの。ひとりはあるせて。うさぎは
さなほもまむ。をとこひまもりて。ハ木丁ちかと
ゆてまてたり。殿うさぎをおろしみるに。人も
うちつけかとぞうにくされとあれもうとく
しきことをきれしぬやをくてなん日さけてまうの侍。
かの君ハ侍くらのかりのくうちにある名乃うくあ
きいけ（例）をり（招）ぞ。君をおりえさ柳のかくこあ。
をのをりめかとぞ。ぞめしきれハとりもうへけくそ。
ちやうなう人とも十七人うぞのはうたまり

ゆめとり八ゐ引
直衣ナリ小口
紅ノ小口袴ナリ

うういと高ぞまうあひ梅三位（徳子）とりつぐ人くしにハ。
こ大夫式部うちまハこ少ねはうしぞ。ぞ。ぞ。こちやうの中ま
二ぞうあくくおくまれあさ月光あひてまもあさ
まてうつけなうはまへなうう人ハはなぞ（注上）しごくち
をり。ぞハ。ぞいのをれあ井乃はそこうぞりえさ柳。
山吹のはうう人まハえびそめ乃ありものはう。柳のう人
ちちのはこうち紀。ぞんを名をめつくしくいまあ
ぞをれうあるこハいとぞをうあれハこのおくにやとう
をへうこまりてあうう。中つきれめとぞいて乃をう
くぞ丁のぞ袴うみかぞうあいてをうぞおまりう
傍
うハくしくあとハあくあちれぞゆうふりのく
緩

しれさゆうらして。さうかくふ人とし川へく。かとく（廂）
むらさきをひうちてう。えひそめのおりものゝこうちき。
むかしのあやいろは。さくらのうらめさうかの日は
人のさうそくハつねとなくつくしてう代袖くち代あるひ。
かうくて○うる人しもはまへの物とりいつとてそうゝの
かんちらめ。殿上人まうしいてゝまかりつことあり。
のちに宰相（懐平）の君あとくらわしうり給めりし。さうハ
あしくも侍りけれ。ちとおもひのほかえくうなり。ご大夫
ハくれかね一ゝされ。うへまこうりそいの。これうすさい（五）つとかされ
すりうゝあはくし。源式アハこれは又こうりそいのあやそ。
こそ侍りめりし。おりものあしぬとゆるしますやそれある

うち代ちとまかうなりあしをしてそうりおやまちの。
かの君しうしん。かもみえともえしあ給へきれ。ちぬの
とより給うりハいふへさしとおしをもち（餅）ぬまいりを給ふ。
まこともちてはさい（對）おとまうて（罷出）くひきうし代ことをあくう
きハまうへの女房ハ九丁のあしわりてのひ（晝御座）のおましふ。
としかされさうやうまておさねつう。三位とさしあえさく。
内侍のすきちらも。おまさまいりゝあの人ゝハちらう（若）
どハあきしのしも。東のひさしの南れさうし（障子）にかけてあち
くミ（御簾）とかきてうに上らうハねてうり。みす代ひんうしの
ちさ給てすうしあうふ。大納言代君ごかねの君ね給へう
ありゝうゝ○めれてみうゝ（手敷）うへハひしあさ代は座そは膳（モノ）

まうすまうすおまへの御しつらひ。ひつくうんうさ
ぶ。すのこに小むしろ。ひさしにてうんうち。えだ
たうち。内大臣殿公季公おはいとの。まえ。大納言殿。
ハ。えだ。侍ふ。うち。ぬ。ひあそひあり。殿上人。ハ。あの。對廊
ふ。うらうらにうつくしう。地下ハ。さまれり。
うけまきのあそん。こまうせのあそんぞ。ぞ。
あそやうの人。上くうしよ。大納言。拍子。ぞ。弁。
琵琶筝
ひさ。こまハ。右の宰相。中将。笙笛。うの。ゑ。ゑ。双調。
安名尊
しあすて。あ。ぞ。うと。つきふむ。席。ろ田。此。ゑ。なとうふ。
うくの。ハ。ハ。とうの。とう。鳥破急。とあそふ。外座。のさにもてうし
あとをぬく。千にたう。拍子。ぞ。伊勢。ぞ。ぞ。ぞ

後附

寛弘七年十一月廿八日遷新造一条院　中宮同行啓

寛弘七年

左大臣藤道―　右大臣藤顯光　内大臣藤公季 左大將

大納言藤道綱 傅　藤實資 右大將 按察使　權大納言藤齊信 中宮大夫

同　藤公任 皇太后宮大夫

權中納言源俊賢 治部卿中宮權大夫 十二月十七日正二位　中納言藤隆家

權中納言藤行成 皇太后宮權大夫 侍從　同　藤頼通 左衛門督 春宮權大夫

中納言藤時光 彈正尹　權中納言藤忠輔 兵部卿

參議藤有國 勘解由長官 三月十六日修理大夫　同　藤懐平 右衛門督使別當 春宮大夫

同　藤兼隆 右中將　同　藤正光 大藏卿

同　源經房 左中將　同　藤實成 左兵衛督

同　源頼定

左中將藤公信 藏人從四位上 内藏頭　藤教通 從四位上 十月廿八日從三位 中將如元 十五

少將藤濟政 十月廿五日 右中將　藤兼綱 從四位下

藤忠經 藏人正五位下 正月七日從四位下

藤定頼 二月十六日元右 十二月廿日正四位下

源朝任 藏人從五位下 十一月十五日轉任元右

右中將藤兼隆

藤頼宗 十一月廿八日 正四位下

源濟政 十一月廿五日任

少將源雅通 二月廿日兼 木工頭

藤道雅 從四位下

藤好親 正月七日從五位上 左兵衛佐

藤定頼 從四位下

源朝任 二月十六日任元少納言 任右

藤經親 二月廿五日任 元左衛門佐

蓋聞斯書紫式部之所記也式部寛弘三年之臘始官仕中宮後號上東門院是也若其博覽俊才則固世所偏知也其官仕之間見聞所及進退所經聊注録以成一書其雅趣藻詞實與源語相爲伯仲然此書本非日次之體而呼之日記者未審姑且依舊題不輙改之其間難解者畧標記傍注以便省讀門人谷村光義

更撮取言五節舞姫之事者以附後而
與本書相發遂附之剞闕以與于門下
之士云爾

享保巳酉年黃鐘中澣　壺井安鶴翁

後補

○大嘗會本朝月令五節舞者淨御原天皇之所
制也相傳曰天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄
爾之間前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女髣
髴應曲而舞獨入天瞻他人无見舉袖五變故
謂之五節其歌曰乎度綿度茂邑度綿左備須
茂可良多万乎多茂度邇麻岐底乎度綿左備
須茂光義按更有本據在

○續日本紀聖武天皇天平十四年春正月丁未
朔壬戌十七天皇御大安殿宴群臣酒酣奏五節田

舞訖更令少年童女踏歌○同十五年五月癸卯宴群臣於内裏皇太子親儛五節云云

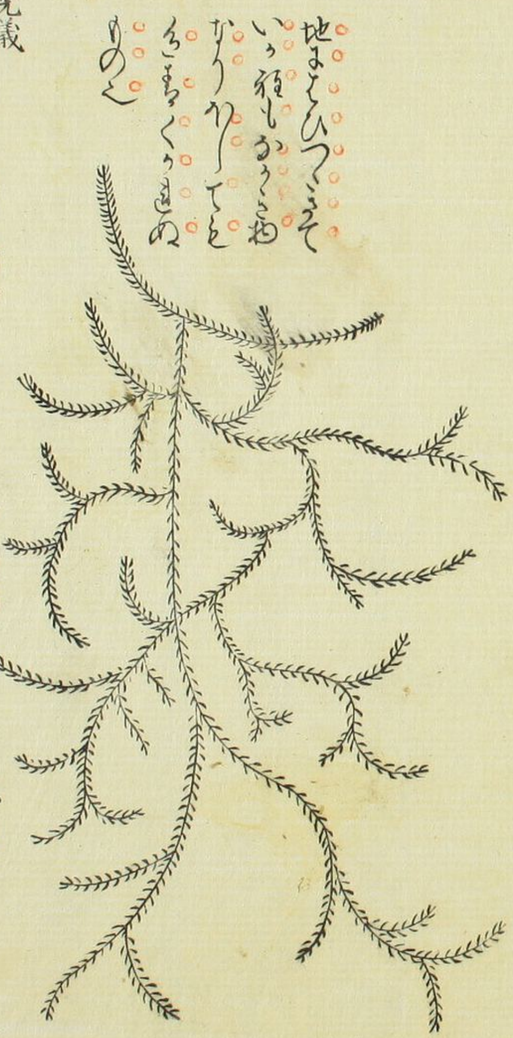
○類聚國史嵯峨天皇弘仁五年十一月壬辰宴侍臣奏五節儛賜祿有差

○本朝文粹善相公清行十二箇條五節舞妓臣伏見朝家五節舞妓者太嘗會時五人即皆預叙位其後年年新嘗會時四人無預叙位之例由是至于太嘗會之時權貴之家競進其女以宛此妓尋常之年人皆辭遁可闕神事爰有新制令諸公卿及女御輪轉進之伏案故實弘仁承和二代尤好内寵故遍令諸家擇進此妓即以為選納之便也諸家僥倖天息不顧摩費盡財破産競以貢進節略

○雲圖抄裏書五節次第也日舞姫等參入裝束畢後預藏人觸其由於貫首大歌參畢後可申歟藏人頭奏聞或令藏人奏次御出頭以下前行秉燭脂燭公卿在御後入大師局殿下入必無次第茵几帳各以具之薫爐持隨髮上相副參入半帖上敷茵前立几帳但立舞之時撤件几帳云云次舞姫等參入同入給他公卿徘徊馬道邊隨所所便宜或上藹一兩參入云云次小歌相和次舞畢退下六位抱之次還御○寅日殿上笛

淵醉朗詠今樣三獻畢有亂舞（次第略之）同夜御前試預藏人奉仕御裝束尅限大師參上（預藏人催之）次舞姫依次參上（或無次第云云）藏人頭於南殿西腋戶下禁祭陪從闕入免入者髪上一人（取几帳）童二人（持薰爐茵等）自餘不參次殿上戶右青璅門閉之不開次主殿官人自北廊列立庭中舉炬火次大歌參上著座次發歌笛次舞畢内侍宣可返御歌之由次藏人頭問大歌人（御物忌之時不問其詞云誰）○卯日宴飲如昨日童御覽奉仕御裝束（后宮御所本宮大夫若親昵公卿宮司奉仕之）次御座定公卿候簀子敷或賜圓座但不賜故實也次童女參御前（雲客副之或召扇雲客持參）次下仕參（藏人副之各一所參畢又召他所也）事畢次第退入夜行幸中院（其儀在別）○辰日節會次第畢及三獻大歌發歌笛先是舞姫參上候御後下小忌大盤之後舞姫參上（髪上闈司相副）於第三間列舞主殿女孺四人秉燭照舞畢舞姫退下歌人退下次入御○類聚雜要抄舞姫裝束○巳日赤色唐衣一領織物褂一領茜染打褂一領織地摺裳一腰茜染三重袴一腰扇一枚鞋一足○寅日青色唐衣（加裲襠）蘓芳木濃裳一腰茜染打褂一重同三

重袴一腰扇一枚錦鞋一足○辰日日蔭髪赤
紐青摺(秘傳)唐衣一領泥繪裳一腰茜染打袙一重
同三重袴一腰扇一枚錦鞋一足○傅(カシヅキ)唐衣裳
○童汗衫(カザミ)袙單表袴下袴扇差櫛物忌(ミキ)紅薄(様)○
下(モ)仕(ツカヒ)袴打衣單唐衣裳袴○樋洗(スヽシ)上雑仕等装
束略之
○神代巻(盤戸段)猿女君遠祖天鈿女命以天香山
之真坂樹爲髪鬘(カツラ)以蘿(蘿比云比飛)爲手繦(節略)
○延喜四時祭式(供新嘗料)日蔭二荷(節略)
○和名抄苔類蘿唐韻云(日本紀私記蘿比加介)



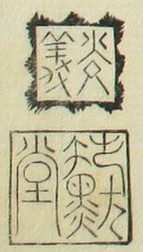
地まとひつくさそ
いつ程もかうさわ
なりかりてを
ちまくうまめ
ものこ

光義
按日蔭(ヒカケ)蘿(カツラ)又ハ女蘿(カツラ)とも或ハ下苔(サガリコケ)と云ひ
俗名ハ狐乃(オ)とゝ勞(ロウ)といふなり則我雄德(オトコ)山あり
多くかり取て北山乃邑湿地ハまさにかりこの

日ゝけ代神代ハ多綴ヨ用ひ来ル事ハ
延喜式ニ日蔭二荷とあるを見あり但後世ハ
白糸とゝ合くあるまたはくみくあるひ結と
いひ日蔭乃ゝと名付く男ハ冠乃たゝり
八節 組立一丈二尺計細 九組ヨリ日ゝけ組と寸 そゝあり或ハ白糸と組く
用ひゝゝ人をあり是とん業ヨリ冠乃かん
さゝまゆゝひくゝたゝなる甚ん業とゝハ梅の結
花代作枝ヨ付ゝを

一日侍于老師校紫式部日記之席以其中
有五節舞姫之事命余録其可與之参考者
故嘗謄寫所聞就而正焉則附之于巻末矣
最不堪報愧云 爾

享保十四己酉年臘月下弦 石清水社士 谷村光義



錢屋儀兵衛